論考

アーカイブズ散策(1)
百年前の入園風景

―第十一巻第四号（一九一一年四月）より―

浜口順子

本誌の前身である『婦人と子ども』の一九一一（明治四四）年一月号の「雑報」欄（p.47）に、「フレーベル会」に新しい幹事が三名就任したと報告されています。その一人が倉橋惣三で、すでに「編輯」担当であった和田實と共に『婦人と子ども』の編集にかかわることになったのでした（この時同時に庶務担当に新任されたのが、後に東京女子大学学長になる安井哲でした）。ちょうど今から百年前のことです。『婦人と子ども』がフレーベル会の機関誌として創刊（一九〇一年）されてから十年後のことでした。

その号に「寄稿募集」の記事が載っています。第一は、「課題」投稿を募集するもので、第一回のテーマが「新入園児の取扱い方」です。今回、ここで紹介する「幼稚園日誌」はこの課題に応募された記事に違いありません。第二は、「日々保育の実際の間に絶え間なく起こってくる出来事や、ご感想や、いろいろの御工夫や、慣れてはご自身それ程にもお思いにならぬ事の中に、他の人には珍しい大いに参考になることがある」ことを知らせ合うという目的のもと、「保育の実際」コーナーへの投稿を常時受け付けると広告しています。先の寄稿募集が二か月間ほどの猶予期間で締め切りが設けてあるのに対して、こちらは締め切りなし。

「いつでもお心づきの度毎にやさしい言文一致で、ふだんのお話のままを書いて送っていただきたいのであります。」この編集趣旨は、現在の『幼児の教育』の編集方針ともまったく変わらないのですが、「保育の実際」という表現には少し時代を感じます。確かにこの時代のものを読んでいると、私たちが「（保育）実践」と言うところを「実際」と呼ぶことが多く、現在とは違う新しい息吹を含んだ熟語だったのだろうと想像されます。

幼稚園日誌（新入児の初め一週間）

後藤りん（双葉女学校）

◆四月一日、月曜日、曇　今日は学期の初まりで幼稚園も新入が却々多い。幼児は今日初めて家庭を離れ、社会の交際場裡に立ちまじる、初舞台若しくは初陣とも云うべきでありますから、一日不安の面持ちで付添人にひたと摺り付き居るもの、怖いもの見たさに袖の下から窺き居るもの、保姆に年や名前を聞かれて羞ずかしそうに顔をそむけるもの、逃げ出すもの、甚だしきは泣きだすもの、初めから一つ場所に凭りかかり少しも動かぬものやら、適には人馴れて付添に手を曳かれながら此処彼処と見物して歩くもの、又は親しき友に遭って、さも、懐かしそうに亦羞ずかしそうにして居るものやら、恍惚として人のはね廻る有様を熟視し居るもの、籠の鳥でも放したように無闇矢鱈に飛び廻るもの、家を出る時は大威張りで出たのだが一人残されて、何となく淋しくて、大声揚げて叫き喚くもの、今の今まで親にせがんで入園をしたのだが、扨て幼稚園に来て見ると急にきまり悪くて拗ね出すものと、それはそれは色々で各家庭の躾け方に依って小供の仕草が皆違っている、それと同時に家庭の状態がほぼ推察が出来て却々面白いものであります。今日は皆一つ所に集まって極く小供らし

い、極く簡単なお話をしてあしたは今日よりもよく面白いことをして遊ぶ約束で唱歌を唱って帰った。唱歌も君が代をやっと、唱った。五色の声と云うけれども、どうして今日は十色位の声が出た。

◆四月二日、火曜日、晴　昨日保母から少し安心の出来るような話を聞かせられたので、小供も大分落ち着き人馴れても来た。それでソロリソロリと小活動を初める。どうしても家庭が自由放任主義だと、小供も早く手が離れて直に友をつくるようになるが、扨てこれと反対な家庭で、多くの婢僕にかしずかれたり、あまり愛に溺れ過ぎたり、虚栄の強い母親に育てられて小供は、兎角強情で我儘で偏屈で其上に依頼心が甚だしいのだから、人に容れられるのも遅く、又人に懐くのも却々遅い。扨て前日の約束もありますから、保姆も今日は大車輪で成る可く家庭の遊戯に懸隔のない飯々事（ままごと）や、人形いじり、砂遊び、自由積木、摺紙（たたみがみ）なぞで遊んだが、（中略）活動の少ない、積木とか摺紙などが大請て、倦まず厭かずと云う所で自由に遊んで帰った。あしたの神武天皇祭は如何なる旗であるかを、極く極く簡単に話して帰した。

――四月三日、四日は省略します。（編集部）――

◆四月五日、金曜日、快晴　大分今日は新入生も愉快そうに、活動して来た。八時半と云うに最早皆登園して来ている。ある団体は積木を盛んに積み上げて如何にも面白そう。或る団体は絵本をひろげて熱心に視入っている。又或る団体は独楽廻しで夢中である。或る団体

は電車ごっこで走り廻っている。ある団体は叔母様ごっこでさも楽しそう。又運動場のある団体は今や鞦韆（ぶらんこ）の真最中。こちらの団体は砂池に這入って盛んに隧道、堤防を築きて得意満面に笑をたたえて遊んで居る。こちらの団体は草花を摘み摘み蝶を追って嬉々として飛び廻り、或いは輪とび、鞠つき、鞠なげ、とそれはそれは面白そう。天気も昨日にましての好天気で監督者の吾々も共に天国に遊んだような気がした。（後略）

◆四月六日、土曜日、曇天少風　今日の新入生の状態は昨日とあまり違わぬ様であった。凡て人は大人でも少人でも一時の変化を喜ぶものであるけれども、五六日たつと又もとの境遇を思い出して、何となく淋しく、うら悲しく感じるものであります。小供も矢張其如くで昨日までは大いに活動して愉快に遊んで居った児が、今日は急に幼稚園が嫌やになって今迄一度も泣かなかった児が大声出して泣きたてると云う様なことが間々あります。之れは俗に云うお里恋いしというので必ず二三人はあるのであります。（中略）故に保姆たるものは此小供の心を斟酌してあまり無茶苦茶な小言なぞは言わぬように徐々に懐け、正直や服従とか規律、忍耐、独立と最早此時分から別に教えると云うのではありません、知らず識らずの裡に良い習慣のつくようにしなければなりません。（後略）

＊就園率は当時2％程度だった。恩物中心保育からは脱却しつつある。この幼稚園では、使用人が子どもの世話をしたり通園の付き添いに来たりするような家庭の子どもが一般的であったようだ。

（お茶の水女子大学大学院）